明治卅六年四月五日第三種郵便物認可　每月一回一日發行

家庭雜誌

第五卷

第二號

明治三十九年十二月一日發行

Dai 5 Kan. **KATEI ZASSHI** Dai 2 Gō.

安心のいろ〳〵……堺利彦……一
予の想望する自由戀愛……大杉榮……二
僕の此頃の生活……堺利彦……四
女子の特性と教育……深尾韶……七
（グリンランド市の）家庭園藝會……久田二葉……九
カレーの話……大石祿亭……一一
下足札……上司小劍……一四
媒妁の感……中尾傘獺……一五
原宿生活……西村渚山……一七
狂言戲語……猿男……二一
秋の一日……荒畑寒村……二三
戀に醉へる友に……小山田つゆ子……二五
女學校評論（一）……目黑里人……二六
△實踐女學校
雜誌のぞき……三〇
新刊紹介……三一
ローマ字欄……三二

家庭雜誌社

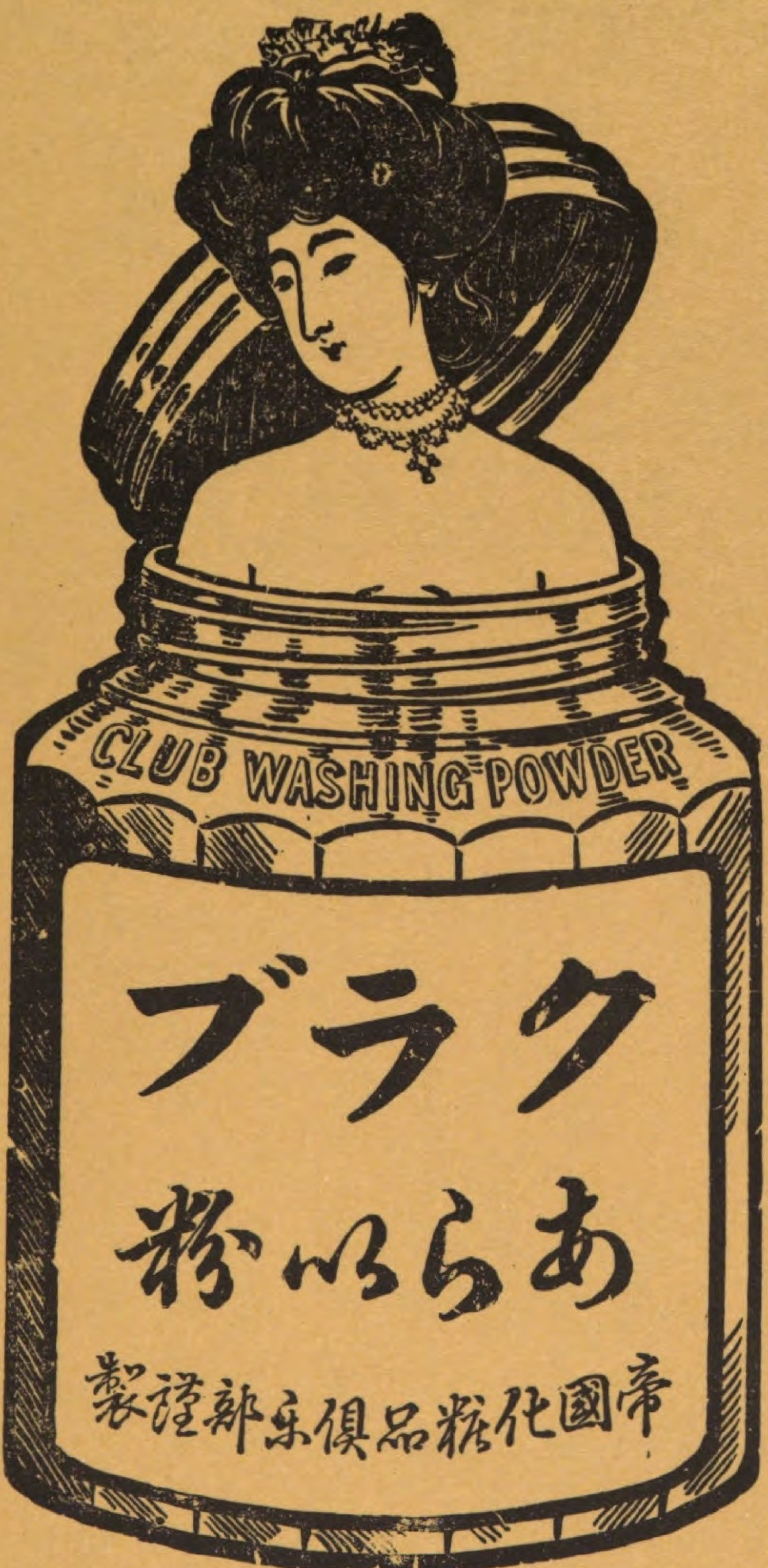
東京市牛込區市ヶ谷田町二丁目廿二番地

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

石鹸と洗粉は何れが好きか

●壹圓の舶來石鹸よりもクラブ洗粉は衛生美身術に適合す

●幾百種の洗粉の中にてクラブ洗粉のみは石鹸以上の特點あり



●クラブ洗粉は御婦人方は勿論紳士方の愛用もまた盛なり

●クラブ洗粉は各地の信用ある呉服店及び小間物店化粧品店にて販賣せられつゝあり

神戸市花隈町間ノ踏切上ル本店
大阪東區北久太郎町四丁目御堂筋角支店

中山太陽堂

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

家庭雜誌

第五卷第二號

明治三十九年十二月一日發行

安心のいろ〱

彦

◎慕はしき夫の力を堅く信じて、只それにのみ依りすがつて、全く安心して居る婦人もある。

◎可愛き孫の立身出世を堅く信じて、只それにのみ希望を繋いで、全く安心して居る老婆もある。

◎平生恩顧を受くる先輩、親分、長官などを堅く信じて、只それにのみ追隨して、全く安心して居る男子もある。

◎浮世は金ぢやと堅く信じて、我が財産を後生大事、或は貯金、保險の法を盡して、そこに全く安心して居る人もある。

◎金も人も深く賴むに足らずと爲し、只だ一心に全智全能の神佛を信じて、そこに全く安心して居る人もある。

◎骨肉を信じ、親戚を信じ、友人隣人を信じ、一般世人を信じ、更に廣く人間共同生活の力を信じ、只だ人情に依つて全く安心して居る人もある。

◎人を信じ、物を信じ、人間社會を信じ、天地宇宙を信じ、只だ自然と同化する事に依つて全く安心して居る人もある。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

予の想望する自由戀愛

大杉榮

嘗て家庭雜誌のチラシを拵へた時、其の中に『我々は將來の自由なる男女關係を想望する』と云ふ、何だか漠然とした、併し甚だ希望のあるやうな文字があつた。予は此の『將來の自由なる男女關係』即ち自由戀愛に就いて、眞面目に且つ大膽に予の想望する所を書いて、讀者諸君と共に細心なる研究を試みたい。

現社會は、黃金の社會、掠奪の社會、貧窮の社會、競爭の社會、虐遇の社會である。戀愛も亦、幾多の障碍と故障と邪魔とに出遭つて、跡かたもなく蹂躪られてゐる。そして兩性の結合は、必ずや、偶然に成立するか、或は貪慾の犧牲に因るかに在る。此の破られたる戀愛の慘と、偶然的結合の愚と、犧牲的結合の暴とを自覺して、男女の關係を總ての桎梏より脫出せしめ

んとする、是れ即ち自由戀愛論の本旨である。

然るに現社會と戀愛とは、氷炭相容れざる仇敵である。戀愛の纖手を縛する鐵鎖は、『資本』てふ嫉妬深い現社會の主人に握られてゐる。戀愛が其の美しき頭をもたげて、自由の野に舞ひ出でんとするには、先づ此の鐵鎖を打ち破らねばならぬ。即ち先づ『資本』と云ふ現社會の經濟組織を破壞せねばならぬ。自由戀愛の花は、共產制度の野に於て、始めて其の高き匂を放つのである。

チラシの中に『將來の』と云へるは、即ち共產制度の時代を指したのである。

然れども予は、此の新社會を以て、强ちにエデンの園の如く思惟する者ではない。其處にも矢張り、今日と同じく、試みの愛、盲探しの愛、迷ひの愛、僞りの愛、惱みの愛などゝ云ふ、種々の謬れる愛の存在する事と思ふ。されど彼等は、男女共に、經濟上獨立の自由を有つてゐる。迷ひの夢の醒めた時には、いつなりとも勝手に離婚するが善い。離婚は自然である、恥辱

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

でも不貞でもない。結縁の數の多い事は、決して不道德でない。寧ろ、心の親和の肉の親和に伴はざる結合を續けるのは、甚だしき不合理である。又、男も女も、若し性格と傾向との眞に一致せる配遇者に遭はざる時は、假りに他の男或は他の女と一時の契を結びたりとて、敢て不埒とは云へない。要はたゞ、眞の結合者を得るに在る。一度にして得たる、二度にして得たる、三度にして得たる、總て善し、度重なればとて敢て問ふ所に非ず。於是乎、未だ男子と接せざる乙女を、處女と稱して甚だ珍重し來れるが如きは、全く無意義の事となる。されば、二人の女を撰ぶに、一人は品性も學問も遥かに劣つてゐるけれど、處女である、と云ふ理由の下に、其の女を採るやうな愚かなる男子はゐなくなる。

此の自由結合てふ言葉を聞いて、人はよく驚いて問ふ、然らば子供は如何するのかと。

予は此の疑問を二つに分けて答へる。

其の一。疑問者は子供の養育の爲めに、食物、衣服

等の費用を御心配なさると見える。されど世は既に共產制度の時代である。女は自ら生活する外に、猶其の子を養育する權利がある。今日に於ても、夫に捨てられたる女にして、能く其の子を養育しつゝある者、甚だ多きを見るのである。

其の二、疑問者は又、小供が家庭の道德を味い、其の周圍の暖かき空氣に觸れる事の出來ないのを、大さう氣遣つてお出でのやうに見える。併しながら予は、父と母とが、出て行け、出て行くと、毎日相爭つてゐる家庭が、若かく惜まる可き道德の家であると思はない。寧ろ、斯の如き不規律なる、虛僞なる家庭より、一刻も早く小供を連れ出すが善いと思ふ。

又、自由結合論に對して、反對の聲を擧げるものがある。曰く、男女の結合は唯一にして永續的ならざる可らずと。

予は此の反對論に贊成する。戀愛の熱情は、昨日まで相識らなかつた男女の二人をも、深き暖き親和に導くものである。そして此の男女の永き共同生活は、御

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

互の間に情愛の心と尊敬の念とを起さしめる。男女結合の意味は決して並置ではない、混合である。兩性の一方は、他の一方と接觸して、進化もし向上もする。

然れども此の理想の名の下に、離婚を非認するは甚だしき誤謬である。靑春の男女は、必ずしも常に、當を得たる結合を爲すものでない。前にも云へる如く、種々なる誤れる愛に陷るものである。此の場合に於て、若し離婚を拒絶するならば、如何にして結合の永久に幸福なるを望む事が出來やう。故に自由結合は、決して永久的結合を拒否するものでなく、寧ろ、之れが爲めに缺ぐ可らざる條件である。又、結合に完全なる自由を許さずして、愛を基礎とせる結婚が出來るものであらうか。愛は必然に自由を要求するものである。

以上は、自由戀愛の芽が共產制度の初期に於て、如何に萠え出づるかを示したのである。而して其の第二期、第三期と發展し行くさまは、更に機會を得て、再び讀者諸君と相語るの時があるであらう。

僕の此頃の生活

東京の郊外、柏木の里に住める

堺　利彦

◎八疊、六疊、二疊、家賃八圓二十五錢、家內は夫婦二人きり、外に『權』といふ妙な名の小犬が一疋居たけれど、ツイ此間死んでしまつた。丁度その翌日、箱根林泉寺の愚童和尙が遊びに來たので、幸ひ讀經を賴んで見たが、イヤもう死んだものは助からないと云ふ事であつた。

◎庭は二十坪ばかりの長方形で、婚禮の嶋臺を見た樣な五葉の松が六七本並べて植えてある。何の事はない、芝居の舞臺の、大廣間の建具といふ見えだ。

◎井はお隣とモアヒで、ハチ釣瓶になつて居る。處が其のハチ釣瓶の柱が碧梧の自然木で、而もそれが此家の新築と同時に、枝を切つて植えかへたばかりのであるから、水を汲むたんびに根の處の地盤が動いて、甚だ氣毒な感じがする。來年の春、芽が吹いて呉れると

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

善いが。

◎此家はまだツイ此間新築せられたので、僕等は建具の無い中から住込んだ位で、新しいと云ふ點に於ては申分なく、總てが小ザッパリとして甚だ愉快であるが、然し安普請の悲しさには、そこもこゝも初から毀れて居る。座敷の障子にはめた硝子の縁などは、そも／＼出來上りの當日から、既に上の一方だけ取れてしまつた。便所の戸の如きは、此頃大抵五日に一遍ぐらゐ、蝶つがひが外れてしまふ。それでも有がたい事には、雨の漏だけは此頃やうやく止まつた。

◎一體此邊は謂はゆる戰後の景氣で、急に借家町が出來たので、今でも毎日表や裏に鑿の音が聞えて居る。現に僕等が引越して來た時には、轉居を知らせる葉書の端に、門前には岡穂の畑があるなどゝ、自慢らしく書いたのに、今ではそこに二三軒も新築が出來て、まだ其上に夜なべまでして跡の新築を急いで居る。折角町中を逃げて此處まで來たのに、此分では又逃げ出さねばならぬかも知れぬ。

◎然し、それでもマア、こゝはさすがに日當りが善いとか、空氣が新鮮だとか云つて朝日に向つて深呼吸など試みながら、姑く此の猫の額を小極樂にして居る處が、實におめでたい次第である。

◎八疊の座敷には、さすが文人生活の印に、本箱が二つ三つ、横文字の本の四五十冊も並んで居ようか。來客の中には、麹町の家に在つた例のブリタニカが見えないがと、訝る人もあるであらうが、あれは遂に月賦の苦痛に堪へずして、先々月から去人の手に引渡したものと御承知を乞ふ。

◎六疊には食卓を眞中に置いて、片隅には簞笥を置き、小机を置き、元本箱の茶棚を置き、是でも一廉の茶の間の積りがをかしい。六疊から障子をあけると直ぐに臺所の板の間で、そこには細君御自慢の石油ストーブが据ゑてある。飯も是で炊く、汁も是で煮る。然し飯を炊くのが面倒なと云ふ時には、パンを買つて來て燒いて食ふ。汁を拵へるのがうるさいと云ふ時には、握飯のゴマふりか何かで朝飯を濟ます。總てがショウ事

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

なしの簡易生活を現じて居る。尤もたまには、到來物のウニの香を賞するとて、風藥の酒一合、陶然として酔ふ位のアチをやる事もある。

◎雜誌「簡易生活」に、上司小劍君が「玄關を利用せよ」と書いて居るが、僕の狹い家では固より玄關を只だ明けては置かぬ。一つの簞笥は玄關に置いてある。洋服もホワイトシャツも此處に釣してある。そして此處が先生御召替の場所になつて居る。

◎扨先生お召替が濟んで、ズックの古鞄を提げてブラりと出る。新開の俗地とは云ひながら、さすがに此のあたり秋の風情に富んで居る。ドウダンの生籬つゝく大久保の通り、山茶花の咲きこぼれたる、銀杏の樹の黄みつくしたる、何とか一句、久しぶりにやつて見たい樣な氣がする。然し是は氣ばかりで遂に出來ずじまい。

◎それから二三町先の幸徳秋水の家に行く。秋水は半病人で外出が出來ぬので、僕は大抵毎日こゝに行く。僕の時間の三分の一は此家で費される。して見ると此

家も僕の家の樣なものだ。此家も日當りが善くて、庭の柿の木に赤い實が四つ五つ殘つて居るなど、チョット趣きがある。近處の犬の大きなのが、何時でも來ては椽側に首を載せて居る。

◎それから僕は大抵毎日大久保停車場から水道橋まで電車に乘つて、神田に在る日刊平民新聞の創立事務所まで行く。其道の秋景が亦た甚だ善い。今日は其の途中で市谷停車場から降りて、家庭雜誌社に立寄つて、そして此の文章を書いた。

新刊紹介

△**簡易生活**（第一卷第一號）　本誌の寄書家上司小劍氏の新たに發刊せる月刊雜誌也。其の主義とする所は「簡易生活は共同生活に依りて實現せらる。而して共同生活の完全なる實現は共産制度の實行に待たざる可らず。されど是れ甚だ遼遠の事也。故に先づ一家内に於て消極的に簡易生活を實行する事に就き些か力を盡す可し」と云ふに在り。小劍氏書を送り來りて、家庭雜誌の姉妹也。仲を善くしやうと云ふ。予は此の妹の誕生を祝し、且つ其の健全なる生長を祈る。（價一部八錢、芝白金三光町三九二、其社）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

女子の特性と教育

深尾韶

教育の三期

グローテイアス氏は、親の權力が子に及ぶべき時を三通りに分けました。即ち第一期は小供の智識や辨別力が至つて幼稚な時、第二期は其判斷力は稍や熟したけれども尙ほ家庭に在つて自己の業務を有たぬ時、第三期は既にそれが獨立して或は一家の主となり或は他家に嫁したる時、であります。此の第二期は女子教育に於て最も危機とする所でありますが、それと同時に又甚だ價値多き時であります。父母兄姉たるものは此際其可憐の少女をして正道を踏み誤らしめぬやう、よく彼等の特性を知つて適切なる教育を施さねばなりませぬ。

印度の神話

昔トワシユトリ神といふ神樣は、世の中に男をお作りになつた後、色々工風を凝らして、二十一種の性質を集めて女子をお作えになつた。二十一の性質といふのは、月の圓さ、蛇のうねり、若木の枝の軟かさ、草の戰ぎ、花の脆さ、葉の輕さ、蘆の弱さ、牡鹿の睨み、かげろふの疾さ、雲のうるほひ、風の浮氣、兎の臆病、孔雀の虛榮心、雀の胸毛の柔かさ、金剛石の堅さ、蜜の甘さ、虎の殘忍、火の暖かさ、雪の冷たさ、樫鳥の喋舌、鳩の鳴聲、だと云ふ事です。女子の特長と缺點とを中々巧妙に評してゐるではありませんか。私どもは此面白き譬喩の内よりして、女子は如何に教育すべき乎といふ眞面目な教訓を聞くことが出來ます。

女子の心理

ゲーテは『男は兎角に性急にして、餘りに結局にのみ思を運ぶが故に、計らぬ障碍に途を堰かるゝ事多し。女は能く心を中途に留めて、障碍を避くべき法を考へつゝ終に結局に達せしめんとす。女の性は之に長せり』と申しました。シルレルは『女の判斷には何故といふ事なし』と申しました。女子の思想は單純で變化に乏しく、物事の全體に注意する能力が缺けてゐる代りには細微なる部分によく注意が行屆き、何事を解するにも抽象は不得手で具體的

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に一事一物を觀る。進取と創造の力に缺けて保守と模倣に長じ、分解解剖して考へるよりは直覺的に判斷を下すといふ風であります。女子が何かの折に觸れて殘忍無慈悲な敢てし得ることは遙かに男子に超え、暗殺の如き慘劇をすら平氣で行ふ程の決心をも瞬間につけて了ふ事が往々あります。其例はロシアの革命で私どもの屢々見る所です。けれども女子と男子との普通犯罪の比例は一と六で、此點に就いては確かに女子の小心翼々、法に適はぬ粗放などを敢てせぬといふ事が現はれてをります。要するに女子が小心、具體、直覺、および感情の昂いといふ事は疑ひありませぬ。而して之が必ずしも缺點とばかり云ふべきものでは無いので、一面は確かに短所であると同時に他面はそれが長所であることを信じたい。私は之を善導して一廉の完全な人民とするのが、父母たり兄姉たるもの丶務めであると思ひます。今の世に於て女子が甚だしく卑しめられるのは、何も女子が男らしくないからといふのでは無い。女子は女子として、心にも體にも常に男子とは異

つた狀態を有つことは天然の動かすべからざる法則なのですから。

人は人なり

けれども女子を以て男子と全然違つた一種の動物だと思へば、それは間違つてゐる。女は女として特殊の教育を要するが如く、人は又人としての普通教育を要するのであります。人間と猿との差よりも男と女との差の方が遙かに少ない事を思へば、私どもは先づ人としての普通教育が十分行渡つた後に、女子の特殊教育を爲すべきです。特殊教育は普通教育のホンの一小部分に過ぎぬのであります。

女子と小人

或人は女子と小人は養ひ難しと申します。又或人は女子には哲學などを考へる頭が無いと申します。又或人は女子は褒めれば附上るし叱れば泣くし殺せば化けて出るし、ホントに始末におへぬものだと申します。誰が此くまでに女子を情けないものにしたのでせう。みんな社會が今まで女子の教育を怠つた罪ではありませんか。私どもは此久しき間の損害を償ふまで、出來る限りの注意を以て女子教育に盡さねばなりませぬ。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

グリンランド市の家庭園藝會

（裏庭の仕末と草花の植付）

久田二葉

世間の人はよく表向ばかりを飾り立てスマシ込んでゐるけれど、裏庭の仕末にはとんとお氣が付かれぬ。けれど之は衛生に大關係を及ぼしますから、其儘に投つて置けぬと云ふので、米國などでは近來當事者がいろ〳〵と世話燒始めたそうです。併しどうも思はしく行かぬので、とう〳〵消極的の遣り方では駄目だといふやうになり、さらば一層花を植ゑたら自然に美くしくなるだらうとて、グリンランド市では之を奬勵する爲め、家庭園藝會といふのを設けたそうです。

なるほど之は重寳な清潔法で、單に裏庭へ花を植ゑるといふ丈けでも、如何に希望と光明とを私共に與へるか知れません。一體裏庭と云へば何處の家でもとかく表ほど手が屆かないで、掃き溜の塵芥や落葉などが、彼方にも此方にも山をなして居て、随分殺風景なうへ、いろんな病氣の源因、即ち有害のバクテリアの巣窟ともなりますから、日本の當事者も衛生の名の下に清潔法執行などと矢釜しく云ひますれど、それは檢査の日丈けでナンにもなりません。で、もし私共も皆裏庭に花を植ゑたならば如何でせうか、必ず衛生以外の効果、即ち住居を美しくし、家人の無性を治し、塵芥を利用して肥料とするなど、いろ〳〵とよき方法、善良なる効果が現はれるに違ひない。從つて私共は讀者諸君へ、是非にもと之を御奬申す次第であります。

そこで以上裏庭に花を植えなさいといふ、私共の奬勵は、即ち本題目の『裏庭の仕末』といふ事の解決で、若し一歩を進めて塵芥を如何にすればよいかといへば、先づ溜り次第藁や枯草や蔬菜類の屑を積み重ね、下水を澆けて腐敗させ、それを花を作る床土の下へ敷き込むもよしまた裏庭の隅へ埋めて腐らし、それから使ふもよろしい。又た農家では直ぐ堆肥の中へ交せれば、何の雜作もないことだろうと思ふ。

次に裏庭には如何にして花を植えたらよいでせうか

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

それには先づ日當りか否かを見て植物の種類を選ばねばなりませぬが、大體物干などの餘地を殘し、邪魔にならぬやうな場所から着手せねばなりません。それで最も世話の入らぬもので上品な、而も年々宿根して肥料も入らないのはオランダゲング、即ち紅白とりどりのクロバーであります。次に餘り足踏みをせぬ隅々、而も日當りの良くないところには、松雪草、エンレイサウ、クロツカス、水仙類などを植え込み、日當りの場所には貝細工、錦葵、矢車草、金蓮花、スヰートロツケツト、ボルダーピンク、遊蝶花、雛菊などの苗を植え付け、春になれば、月見草、萬壽菊、天人菊、金魚草、夏菊、秋菊、百日草、翠菊、など手近な草花の種類を植え出せばよいでせう。なほ其の際には鐵線蓮、忍冬、スウートピー、風車、時計草など植え込み、春になればツンベルギア、風船蔓、朝顔、晝顔、月華、糸瓜などの蔓草を蒔きつければ、美しい趣きを見せて誠に妙でせうと思ふ。なほ又は流し下の濕氣多いところには、菖蒲類、庭石菖、金雀花、鳳仙花、藿香など

をお植ゑになれば『鳳仙や嫁が米とぐ流し下』といふ田園の光景も遺憾なく掬ばれます。

最後に一つ掃溜の所置に便利な方法を考へつきました。これは庭の隅に便宜四尺に五尺ぐらゐに、深さ一尺餘りの穴を掘つて置きまして、掃き溜及び總ての塵を其處へ捨てるのです。そうして數日或ひは數十日でそれに盛り上りましたらば、兼て穴を掘つた時の土を被ぶせて均らし、その上へ花の種子を蒔き、或は苗を植えるもよけれど日當りがよくて春秋ならば、苗床代用として最も妙であります。前に云ひましたことは少々專門の百姓でなくば行り難いが、之れならば何處の家でも容易に出來、且つ掃溜の所置に最も工合がよいだろうと思ひます。以上グリンランドの家庭園藝會の出來た由來を聞き、それを私共の上に當てはめて考へたまでゝあります。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

カレーの話

麻亭生

○西洋料理の献立と言へば、其内に必ずカレー、ライスの一皿が含まれて居ると思ふ人には、甚た奇異な樣に聞ゆるかも知れぬが、カレーは元來東洋の嗜好品であつて、西洋人の口には一種特別の珍味である。カレーが歐羅巴人に初めて知られたのは遠く十五世紀の頃でも有つたであらうが、汎く調理に用ひらるゝ樣になつたのは十九世紀の半以來の事で、今日でも西洋人が之に對する趣味を尋ねて見ると、印度に生活したり熱帶地を航行する船に乘つた人の外は、一般に其趣味を解し得ぬと言つてもよい程で、特に婦人などは絕對に之を好まぬものが多いのである。

○西洋人が初め印度を知つた頃、其土人が殆んど有らゆる食物に此カレーを加味するのを見て「東洋の鹽」であるかと驚いたと言ふ話がある。然るに少しく之を食ひ馴るゝに及んでは、其內に忘れ難き一種の妙味を見出し、彼等が故國へ歸つて後も常に之を賞味すると言ふ。我々日本人が概して之を好むと言ふも、單に其常食とする米飯に調和すると言ふだけの理由でなく、之に東洋的の趣味がある故であらう。今日我國に輸入するカレー粉は、其製造の都合と交通の便利により、或は英國から或は米國から來つゝあるかも知れぬが、余は其趣味の上から見て決して太西洋や太平洋を超へて來るものとは思はぬ。其の煎藥の樣な香のする所などは何うしても印度洋から支那を經て渡來するものとしか考へられぬのである。

○衞生の上から見て、カレーの利害は如何と言ふに、斯う言ふ強き刺激物は病人や小供には素より不適當であらうが、健康なる人には何等の害を與ふるものでない。而かのみならず之を常用するに從ひ、之に耐える力も自然と強くなり、終には多量を用ゐても左ほど感せぬ樣になる。左りとて酒や煙草の如く一つの癖を作つて身體を害すると言ふでなく氣候と境遇の變化により、何時之を止めても格別不快の感を起すものではな

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

い。概して熱帶地方に住居する人は胃の消化力が惰弱になるもので、斷えずカレーの如きものを用ゐて之を興奮させるの必要がある。余が印度に居つた時も二年間殆んど毎日二回つヽ之を用ゐたが、之によつて少しも害を受けた事を覺えぬのである。

○カレーは野菜、魚、鳥、其他すべての肉類を材料として調理し得られ、其味は味噌とでも醤油とでも全く調和せぬと言ふでなく、又之を久しく貯ふる事も出來るので、經濟の上から言つても至極都合のよい食物である。特にそれが我々の常食とする飯の副食物ともなり、且つ毎日之を用ゐても食べ厭きのせぬ食物とすれば、家庭料理には最も適したものヽ一つと言はれるのである。

○近頃盛んに廣告せられて居るライスカレー種と言ふもの。余は唯之を見たばかりで味ふた事はないが、初より之を調理して固形に作る手數や、之を容れる罐代や廣告料や運送費を見積り、尚其上に製造者と發賣人とが利益を得んとするものであれば、地方の消費者の

爲には代價ほどの價値がないものであると言ふ事が推知せられる。而かも其特色とする所は長く保存せられて不事の來客と言ふ場合などに便利な點にある。然るにカレーの如く本來腐敗し難きものは普通の家庭に於ても、以上の特色を備ふるものを拵へる事が出來る。

現に余は數年間自分の庖厨に於て萬年カレー及び乾燥カレーと稱ふる二種のものを作り時に臨んで之を用ゐて居る。其名が唯コケ威しなるが如きのみで實際新奇なる考案でもないが、話の序に左に記して置かう。

○**萬年カレー**。これは先づ普通のカレー、ソースを拵へるので、余が慣用の法に從ふと。

肉百匁を四分角位の大さに切り、玉葱一箇を細かく刻みバタ（或は他の脂肪）と共にフライ鍋に入れ、强き火にかけて淡褐茶になるまで炙り、之を別のソース鍋へ移して置く。

次に前のフライ鍋へカレー粉一大匙と麥粉二大匙とを容れバタを以て焦がし、それへ水或は野菜か肉を煮た汁五合程を灌ぎて前のソース鍋へよく洗ひ流し

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

塩を以て適宜に味をつけ、文火にかけて肉の軟かくなるまで煮る。

これにセレリ、人參、芋の如き野菜を加へんとする時は、別に軟かくなるまで茹でゝから磨りつぶし、裏漉にかけて加へる。

右の如くにして余は一時に多量のカレーを作り、一度之を用ゐた後、其殘りを稍大きな壺に入れ、蓋の下に罅隙のある時は此所へ晒木綿の布片を四五枚挾みて成るだけ空氣の通はぬ樣にし、あまり酷しからぬ火の上で三十分間以上煮て置けば、暑中でも三四日冬ならば十日以上は腐敗する恐がない。又之を用ゐんとする時は壺のまゝ火にかけて温め、用を終つて後は又前と同じ樣に熱して置けば、殆んど際限なく之を保存する事が出來る。但し長く貯へんとするカレーには塩とカレー粉の分量を少しく多くし、葱の外に野菜類を用ゐぬ方がよい。

○乾燥カレー。これは普通のカレーを作る法にて、肉類とカレー粉と別々に炙つた塩とを混合して、更にフ

ライ鍋にてよく乾かし、之を瓶に詰めて置いて必要の時適宜の水を加へてソースを作るのである。

カレーの原料とするには、強ち生肉のみに限らず、ロースビーフやチキンの殘り物にても、又魚の塩燒などでも出來る。其味の稀薄き時は鰹節や昆布のだしを用ゐてもよいのである。

新刊紹介

△いも菓子製法百種　食道樂の臨時增刊として發行せられたるもの。いも料理に關する著書は數種あれど、いも菓子に關しては此書を以て嚆矢とする由也。「甘藷蒸粕亭夏」、「甘藷安部河餅」、「懷中甘藷汁粉」、「鶯霰團子」、「葡萄入甘藷饅頭」、「部蘇甘藷田樂餅」、「煉芋羊羹」「挽茶甘藷煉羊羹」「竹輪芋餡」「大名芋饅頭」「青海苔入芋饅頭」「鶏卵芋饅頭」「甘藷安安部河餅」「甘藷蒲鉾」「甘藷葛の玉糖」「甘藷牡丹餅」「甘藷煎餅」「赤豆甘藷煉羊羹」「茄田舍芋饅頭」「豪傑芋田樂餅」「高尾時雨芋」「鳴戸渦卷芋」「數島霰團子」「山咲霰團子」「櫻花切山椒」「白切山椒」など目次を見たばかりでも甘味さう也。(價廿錢、麴町區有樂町三の一、有樂社)

下足札

上司小剣

◎丸の内の五二共進會と云ふものへ行つて、繪畫の出品を觀て居たら、『共進會々頭、松方正義と云ふ人が見えたから、お目ざはりになつてはイケない』と云つて、事務員らしい男が僕等を追ひ出した。

◎主人が來た爲めにお客を追ひ出すと云ふ店は廣い東京に五二共進會唯一つあるだけであらう。成る程、或る新聞の批評に、特色ある共進會と書いてあつたわいと思つた。

◎翌日また五錢の入場料を奮發して、五二共進會へ行つた。執念深くつき纒ふわけでは無いが、己れをなやめ害ふもの丶爲めに祈禱すると云ふ教訓を守つて、『己れを追ひ出して五錢の入場料を棒に振らせた人』に、また五錢を與へに行つたのだ。

◎この日は日曜で、入場者が多數で、混雜が甚だしくて、能く觀て居ることが出來なかつた。ソコ／＼にし

て、出口へ來ると、下足渡し場の混雜はまた大變なもので、多くの男女が我れ勝に下足札を突き出して、『山の三十二番』、『はの五十六番』、『オイ早くして呉れ』、『コ、だよ／＼コ、だよ』、『乃公のが先きだ』、『チョイとアタシのを早く出して、下さいよ』なぞと、多くの人が盛んに自我を發展させて、下足札を握つた手は、腐つた木に名の知れぬ蕈が叢り生へたやうに、眼の廻るほど忙しい下足番を目がけてつき附けられて居る。

◎僕は、兎てもこの分では急に下駄を穿くことは出來まいと思つて、夕方まで待つ覺悟をきめて、下足札で頭のフケを掻きながら、横の方に立つて居ると、下足番の男は何思つたか、己れの眼の前に、千手觀音のやうに現はれた下足札の手を棄て置いて、イキナリ僕の方へ飛んで來て、無言で僕の下足札を奪ひ取つて、直ぐに僕の四十錢の薩摩下駄を持つて來て呉れた。其の時彼れは小聲で、『厚釜しい奴のよりも、遠慮して居る人のを先きに出してやるんだ、』と云つた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

媒妁の感

中尾清太郎

余は或男女の二人――固より互に相識らざる――を端なく結び付ける役目に當つて、遂に月の某日めでたく婚姻の式を擧げさせた。余は此間の媒妁を爲した爲に、最も痛切に感じた一節がある。それは『男女交際の必要』といふことである。

余の媒妁したる男女は、東西遙かに離れてゐて、曾て一面識もない間柄で、只余を信じ、余の言を信じて、双方異存なく握手して呉れたものであつた。それだけに、余が此經過の際に於ける其苦痛と其配慮とは、一通りならぬものがあつた。併し余は決して無理を爲して双方を強ひ、是非共結び付けやうといふのではなかつた。其處は余の信仰で、大能の聖手の命ずる所に從ふとして、余は余の爲すべきだけを爲し、他は事の成行に任せて置いた。即ち双方を紹介説明するに當つても、余が知れる限りの長所短所美點缺點を、率直に言ひ表はして、互に滿足のゆくやう聴き取らせ、後は細工を加へず、事件其自身をして其進行に任せて置いた。然るに事件は意外にも着々として、と云ふよりは寧ろ初は處女の如く、終りは脱兎の如き勢で進み捗つてしまつた。

余は『大膽なる哉』と、屢々自ら惘れたことであつた。双方の男女生れて茲に廿餘年、いざ結婚といふ間際に至るまで、互に見も識らざりしものを――斯く成るも攝理とは信じながら――聖壇の前にわれ媒妁して、其手を握らしめることは、何となく大罪を犯さしめるやうな、否余自身が大罪を犯すやうな、そら恐しい感じを胸に喚んだことであつた。

余は何うしても、我邦刻下の狀勢に鑑みて、男女交際の道を拓かねばならぬと獨り憤慨した。男女交際さへ行はれてゐたならば、斯かる悲慘なる結婚は無からうと、深く耻ぢた次第である。然り、余は神の前に人々の爲に耻ぢ、又男女交際の自由に且つ神聖に行はるゝ先進國に對して、深く耻ぢた次第である。故に今姑

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

く之に悲慘といふ形容語を附け加へて置くを適當と思ふ。

余は男女交際の必要を絶叫せでは已まれぬ。余は敎育ある男女の交際は、利あつて害なしと確く信ずるものである。（其方法は種々あるが今言ふ遑を有たぬ。）隨つて余は男女の共學を主張するものである。（之れを實行するは小學より始めるに限るが、詳論は略す。）余は余の小さき家族をして、女兒は努めて男兒に近づかしめ、男兒は成るべく女兒と遊ばしめることを謀りつつあるのである。今日の如く、學校にても家庭にても、又社會にても、殊更に年齒も行かざる幼男幼女に向ひて、早くより男女の區別を辨へしめむとするのは間違である。不自然であると謂はなければならぬ。まだ互に性の差異を自覺せざる年齢智識に在る兒童をまで、學校にて別ち、家庭にて別ち、社會にて別ち、共に學ばしめず、共に遊ばしめず、共に交らしめざるは、人々の大なる量見違ひといふもので、却つて他日の大間違、大後悔を釀らす原因を、此時に造り置くやうなも

のである。かの青年時期に至つて墮落するやうな男女は、皆曾て嚴肅乾燥なる社會や家庭や學校に育てられた者の中より現はれ出づるのである。何うして初より解放したる男女の生ひ立ち行く間に於いて、鑽隙踰墻の道德的危險を冐すものがあらうぞ。若し斯くの如きものがあらば、それは最早個人の罪ではなく、必ず其境遇に咎むべきものがあつたに違ひないことを斷言して憚らぬのである。さればとて余は今日俄かに中等程度の男女學校を共學にせよ、彼等の間に男女交際を許せよといふのでは無いけれども、男女共學は先づ小學より始め、男女交際は即ち高尙なる學問ある階級より始むべしと說くものである。斯くして異性互に珍らしからず、男は女を悉くし、女は男を悉くして、從來男女間に蟠まりし誤解をも正し、隅々相近づけは直ちに陷らむとしたる危險をも避くることを得るに至るのである。さうして導かれ行く男女交際の道途に於いて、自由にして且つ神聖に結ばるゝ婚姻は如何に幸なる哉と想ひ遣らるゝのである。余は飽くまでも男女交際を主張せざるを得ぬ。余は今回の經驗に於いて、最も痛切に之が必要を感じたのである。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

原宿生活

西村渚山

地所を買つて、邸宅を新築して、抱え車夫でも置いたら、その人の運命は定まる。責任のない借屋住居の間が結句氣樂で、飽きれば何時でも好いた家を搜して換られる、と云ふ人もある。さうかも知れない。實際、近頃の東京生活程無造作なものはないので、井戸さへ一つでなければ、隣り同志で居て、三年間言葉を交はさずとも濟される。甚しいのは、隣家の住人が變つて居るのに氣が付かぬ事さへある。特に、門だの塀だのと云ふ重寶なものは、時に萬里の長城のやうな役目を勤めて、近所の噂や出來事をば、家庭に入れずに追拂つて了ふ。

現に自分の家がこの種類の一つである。第一、界隈の出來事の蓄音器だと云つても善い結髪婦さんは自分の家と久しく交際を絶つて居る。所謂『御用』を伺ひに來る八百屋、酒屋、荒物屋の類ひは日々缺かさず來るけれど、用事を濟せば、さつさと出て行く。それで、近所に自殺騒ぎがあつた。盜賊に這入られた。夜逃げがあつた。と云ふ風の珍事は、翌朝の新聞紙で初めて承知し、『へゝえ』と云つて驚く位のもの。

併し、これ丈近所と冷淡にして居ても、誰一人苦情を持出して來るものもない。只、氏神樣の入費にとて、毎月二錢宛寄進することゝ、大祭に若い衆が踊り屋臺を曳いて來るから、それに十錢銀貨一つ投げて遣る位が、頂上で、これが、何れの區内にもある土着の江戸兒と、自分等のやうな風來の田舍者とが、交渉して、情誼を温める唯一の連鎖だ。自分は此樣にして居ても、土地が性に合はぬのではない。又、家持と云ふ厄介のない身には、家うつりは何時とても自由であるが、郊外に近い、日光に豊かな、この赤土の原宿を棄てる程の勇氣がない。

原宿生活の四年間、種々と一身上の變化があつて、物質上精神上に及ぼした苦樂も多かつたが、それでも、見事大屋から立退きも命ぜられずに過ぎた。敢て

女中を置く程の餘力はないけれど、緣日に草花を購ひ、銀座に出た時に、額緣の面白いのに見惚れて、買つて歸る位の贅澤はして居るのである。此の長い月日の間に、自分等夫婦が誰と一番に近しい知合になつたか、と云へば、お隣りの馬場氏一家を措いて外にはない。これは自分の移つて來た當時から居る家で、主人は中學の先生。お婆さん、奥さん、坊ちやんの四人暮し。質素で、平和で、用心深い生活を營んで居る。大屋が同一、井戸が同一と云ふ關係だから、これには每日厭でも顔を合はさねばならぬ。朝は六時頃に表の戸が開く。夜は八時になると、もう門に輪鍵が掛る。訪ねて來る客は大抵仲間の人らしく、偶に細君の兄上だと云ふのが泊客として見えるが、先づ概して靜かな方である。東隣りの二階家は、何でも青山離宮の園丁とやらで、その態度にも、その言葉使ひにも、『官吏風の職人』と云ふものを形造つて居る。今年の春頃に移轉して來たのだが、まだ一口も言葉を交はさねば、名字さへもまだ知らない。細君は『裁縫教授』の看板を掛けて居る。

暖い日に畠にでも出て居ると、北向の二階の窓を開けて、縫物して居るその束髪姿が見えるか、どうかして顔でも見合はすと、魔にでも襲はれたやうに、慌てゝ障子を閉ぢて了ふ。譯は解らない。併し、日々の生活は質實で、寧ろ勤勞を惜まぬのは眞實らしい。夏の早い朝自分は屢々裾をからげて植え物に肥料をやつて居るのに出逢ふことがある。只、此方で面喰ふのは、自分の姿を見ると、木蔭に驅込んで出て來ぬことで、うつかり外へも出られぬ始末である。これも譯は解らない。

昔から向ひ三軒と云ふが、自分の住居には向ひが一軒よりない。それも二室住の手輕な家で、今其所に四人家内の一族が住つて居る。主人は何物か、何時も家に居らぬ。五十格好の强さうな母親と、嫁さんと、女の兒と。そして、その子供には始終綺麗なメレンスの着物を着せてある。まだ學校へは行かぬが、母上さんが敎へるのと見えて、艶な淸元か何かを金切聲で歌つて居る。今にお稽古に通ふのであらう。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

さて、隣家として一通り描寫する義務のあるはこれ丈である。其の外の事は全く知らない。總じて、面白い近所の噂と云ふものは何處にでも存在して居て、女中の耳から、子供の耳から、井戸端から、退窟な時間から——すべて好奇の心にと傳つて來るのであるが、自分の家にはこの條件が缺けて居るから、這入らうにも餘地がない。併し、何れにしても、皆なそれ〴〵の職業と慰藉とに依つて生活して居るのは事實である。
一體原宿文明の抑の開拓者はかの軍人其人であつたらしい。帝國大學の前に西片町が控えて居るやうに、四聯隊の赤い建物の落ちる影は、殆んど原宿の全部を蔽ふて居るのであつた。伊知地、長岡、豐島、澁谷の諸將の邸宅を始め、佐官尉官の家は數へる違もない程に多い。されば、その文明は軍人式の文明である。朝、目を醒すのは豆屋の鈴でなくして、實は駿馬の轡の響だ。日の暮れるのは、小演習を卒へて戻つて來る兵卒の足音で知れる。小石川の谷合では工場の滊笛が時計の代用をするけれど、原宿の時間は兵營の喇叭で折々

間に合はす。貸家には必ず厩が附いて居るが、建物は極めて粗末で、軍人の趣味を輕蔑したものである。
天長節の觀兵式と云へば、都の隅から隅にまで、劇しい波動を與へる刺擊物であるが、原宿は勸進元と云ふ格で存外に騷がない。其の代り、當日の朝の景色は一寸見物であるかも知れない。我家の寶だと思つて居る五彩燦たる勳章が、細君や娘の優しい指頭で、あの廣い胸一杯に飾付けられ、國旗に輝く朝の日光を受け乍ら、用意の馬に勇しく跨つた時、其の將校は如何に立派な武者姿であらう。銳い眼、漆のやうな髯、澁紙色の顏、怒つた肩、口に葉卷を啣えて、徐ろに手綱を取り、コツト〳〵と道の邊の石に蹄の音を響かせて式に臨む威勢の善さ。道行く人で振返つて見ぬものはない。實際、其日になると、杉垣の多い狹い道路に、此樣なのが幾組も〳〵見られるのである。
去り乍ら、近頃では、原宿も軍人町とは云はれぬ事となつた。一二年此方、異趣味の人が非常に増して來た。これ必ずしも軍人が衰へたのではないが、矢張高

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

便な都市生活に恐れを抱くと同時に、半田園生活の清新な輕便な趣味を聞傳へて、猫も杓子もの流行思潮にかぶれた結果であらう。一寸十分程の散歩を試みても解る。昨日東の空地に築地式の洋館が建つたかと思ふと、今日は西の丘の上に、待合のやうな華車な家が建つ。石の門が築かれる。芝生の庭が作られる。と云ふ調子で、その文明は全く夕の空の虹霓のやうに、種々の色彩を華やかに見せて居る。

自分の家の後は小高い丘の櫟林で、四時異に異なる風致を添えて居たが、昨年あたりから開墾の事が始つて、今日では整然とした立派な町が出來上つた。四年以前とは丸で見違へる程の變り方である。政治家も來た。會社員も來た。實業家の別宅のやうなのもある。今は軍人と云ふ一階級の持物ではない。從來冷淡に構えて居た地主もそろ〳〵皿のやうな眼を開いて算盤を取り出す。貸家主は魂膽を盡して家賃値上げの方法を考へて居る。ほんの先頃迄雜草の生茂つて居た空地が、何時の間にか繩が張られて、建坪と變つて居る。

畦が破されて新道が出來る。窪地が埋められて棟割長家の設計が出來て居る。庭は段々と縮められて、青い物は段々と郊外へ放逐せられる。これが時勢か。兎に角、數年來、首都にとつては足の裏の黑子のやうに、誰かばふ人もなかつた原宿が、今や一變して、複雜な巷となり、劇しい生活の流れが泡を立て丶淀むで居るのである。

前號目次

△宗教のさま〳〵（堺利彦）△男女の差異（コンガーカチコ女史）△細君の說法（堺利彦）△「いのち」のたまもの（金子喜一譯）△育兒小觀（大石祿亭）△不幸の神（大杉榮）△おばさんもよ！（深尾韶）△花つくり問答（久田二葉）△十四日（上司小劍）△胃の腑と塵溜 堀保子）△うたかた（荒畑寒村）△動物の戀愛（大杉榮）△平和、愛、希望（深尾韶）△雜誌瞥見△記者より△ローマ字欄

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

狂言戲語

猿男

△僕の好きな女、「良人の自白」の梅次。可愛らしい女、「湯島詣」の蝶吉。痛快な女、「黒百合」の女主人公。畏るべき女、與謝野晶子。慕はしい女、まだない。

△好きな女は以て僕の細君たるに足る。可愛らしい女は以て僕の妹たらしむべく。痛快な女、畏るべき女は以て僕の友とすべく、慕はしい女は以て僕の姉と仰ぐべし。惜しい哉未だこれあらず。

△男の恐るべき女は、敢て丙午生れのものに限らない。眼光の烱々たるもの最も怖るべしだ。僕之を某々女史に徵して殊に其然るを思ふ。

△紅葉のからくれなゐは革命の色だ。炎々燃ゆるが如しと雖ども、陰謀の暗黒を有つて居る、山茶花のうすくれなゐは、山寺の尼さんだ。清楚愛すべしと雖ども觀念の淋しさを免れない。

△鏡花の筆は紅葉に似て居る。一度之に接するや、恍惚として魂天外に遊ぶも、到底現實の苦悶を脱することが出來ぬ。蘆花の筆は山茶花の如しだ。一度之に接するや、うつしよの淋しさに打たれるが、其中、人を其まゝに醇化せしむる、温き美しさを有つて居る。

△これを女に譬ふ。山茶花には或は僕は戀するかも知れぬ。しかし紅葉はどうしても友たるの交りに出でまい。

△誰しも好いた男や女と一所になりたいのは當然だ。併し自由戀愛は到底現世のものではない。遠い遠い未來の事だ。それを自分勝手な眞似をやらかして、ハイこれが自由戀愛で御座いなどと濟まして道學先生連中に食つてかゝる手合の氣が知にぬ。悟つた人間は理屈を言はずに、自分のやりたい事をやつて居るよ。

△今の世には、理想の夫理想の妻を持つてスヰーホームを造らうなどと、怪しからぬ考を持つて居る奴が多い。馬鹿の骨頂だ。そんな奴は早く極樂淨土へ往生して、スヰートホームでも造るがいゝ。

△どうせ世の中は丸く納らないと相場が極まつてる。女は宜しく「いやになつたら出ますよ」の覺悟あつて始めて人の妻たるがよし。男は「あきたら出す」積りで娶らなければうそだ。「二世も三世も」とか「偕老同穴」とか、意氣込は一寸よさそうだが、其の實僞善だ僕は思ふ。人間の弱味と我慾とが最も善く此語の中に含まれ居ると。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

秋の一日

荒畑寒村

　幾日も雨が降りつゞいて、ある夜恐ろしいまでに、暴風雨が荒んだが、その翌日はカラリと晴れ渡つて、往來の泥濘に、蒼い大空を淡く流るゝ白雲が映つて居る。そゝのかす樣な此の秋色に誘はれて、自分は二三の友とフト郊外に出かけたのであつた。秋の天の澄み渡つた下、紅葉のわづかに交る青葉の中に、音羽の方護國寺の甍は高く聳へて居る。蛛蜘の網と煤とでまつ黑になつた赤い仁王門を潜ると、長い石の道が、落葉におほはれて居る。自分達は本堂の裏へ廻つて、たとはゞ額の創痕を示して、軍語りする老武者の樣な秋の陽を浴びてそゝり立つ銀杏樹に、石を投げては落ち散る葉を拾ひ、その大きな幹に背をふせて、さまざまの物語りをしたのである。

　鬼子母神の杜を拔けて、百性が畑から拔いた許りの大根を洗つて居る小流れの、秋草亂れ咲く岸に憩ふて

遠く連なれる稻田や、彼方の丘や、雜木林や、野中に立てる樫の樹や、小さい流れや、輝ける鐵道線路や、それに沿ふて立ち並べる白い電信柱や、それ等皆な、秋の暖かい日光につゝまれて、パノラマの如く展かれた景氣を、心ゆく許り眺めたのである。田の畦を行く農夫、ドッシリ重さうな黃金色の稻、架稻の蔭からパッと一時に立つ雀の群れ、何一つとして平和の影を宿さないものは無い。そうして居る中に、鐵道線路を貨物の列車がゴー／＼と進んで行つた。機關車の煙突から吐き出す煙りは、まるで春の野にもゆる陽炎の樣にうち霞んで見へるのである。

　皈りの途を自分等は女子大學校の農園の傍にと取つたのである。一群の木立の下から、ゆるい勾配になつて、そこに美しい草花や、いろ／＼の野菜が、美しく生えて居る。今しも白いエプロンをかけた三人の女學生が、大きな籠をもつて、農園に這入つて來た。そして花園を通つて、野菜畑に入り、野菜を摘んでは籠の中へ入れて居る。花やかな秋の陽を浴びた木立を後に、

花園と菜園とうちつゞいて、黄や紅や白や綠や、目もさむるばかり美しく彩られた中に、純白前垂をかけて立つた三人の乙女の、いかに美しく眺められたことであらうぞ。自分の空想は、そのまゝ白き翅をはつて、獨り遠く理想の國に翔り行いたのである。

＊　＊　＊　＊

いま自分は、新しき社會に在るのだ。そして此の新社會の大農園の中で、頻りに野菜を採つて居る三人の婦人は、今日の炊事當番なので、若き美しき一人は、自分の優しい戀人なのである。彼女は些しも自分に氣がつかぬらしく、時々他の婦人と顏を見合せては、美しくほゝ笑むのである。自分はそれがモドカシくて堪らぬので、幾度かその名を呼ばうとしたが、尙は默つて見て居ると、彼女は遂に自分を發見して、晴やかに笑ひながら、手をあげてさし招いて居る。げに樂しき人生よ、自分は心から生存の喜びに充されるのだ。

あゝ樂しき人生よ、この新しき社會に於ては、生産機關は悉く公有となり、富の分配は頗ぶる公平で、貧富

主從、君臣といふ階級もなく、饑餓、窮乏、自殺といふ悲慘もなく、猜疑、掠奪、殺人といふ罪惡も無い。凡ての人は生活の不安から免れて、樂しんで勞働に從事してゐる。教會なく、監獄なく、斷頭臺なく。若者は學び働らき、小兒と老人とは、世の中の花として尊ばれ、旅の人は恰かも兄弟の如く好遇さるゝのである。婦人はつねに晴やかなる笑顏と、愉快なる心情とを以て、男子を扶けて居るのだ。そして多くの家が、一軒一軒に小さな臺所を有つて居るやうな不經濟な仕方でなく一都市に數個の大公食堂があつて、町中の婦人が順番に炊事の任に當るのである。

朝した夕べ、清潔なる廣き堂に、一日の勞働を終へたる男女が、樂しき音樂に耳を傾けつゝ、愉快げに語り且つ食する時や。さてはまた、夕月の光り匂ふ葡萄園の下蔭に、血汐もゆる若き男女が、相擁して戀の歌をうたふ時よ。こゝに虚僞の影を見ず。爭ひの聲を聞かず。眞にパラダイスの如き感を抱かしむるのである噫美はしき吾等が社會、樂しき人生、何故に昔の人は

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

早くその少さき利己心や愚かなる競爭や忌はしき排他主義をすてゝ、この美しき社會を現ずる爲めに、身をすてゝ社會主義に赴かなかつたのであらうか。

＊　＊　＊　＊　＊

されど嗟呼、自分の夢よりも儚ない空想は、忽ち悲しき現實の聲に破られて了つた。「オイ何をして居るのだ、早く來ないか」、友は後れた自分の呆然と立ち盡して居るのを見て、大聲をあげて斯く呼んだのである。自分は何とも云へぬ悲哀の胸は波立つのを覺へて、眼をあげて四邊を眺めると、三人の女學生は、今將に農園を出でんとして居る。

噫この社會は、未だ吾等が理想の鄕ではなかつた。烈しい生存の叫び、悲しい弱者の嘆き、いたましい家畜の呻き聲、それ等のものが雜然として、再び自分の耳に響く。今こそアゝして、やゝ理想の面影をやどした生活をして居る彼の女學生等も、一たび學校の門を出でゝ、實社會の人となつた時、理想と現實との甚しき矛盾に、いかに煩悶することであらう。しかしその

煩悶も悲哀も、やがては烈しい生活の怒濤に洗ひ去られて、終ひにはやはり、小さな一個の臺所を有つた家庭の、奥樣となり澄して了ふことであらう。噫これが悲しい現實なのか。いま描いて居た空想は、たゞ樂しい夢に過ぎないのか。

短かい秋の日足は、やうやく傾きかけて、夕ぐれの風が大空を吹いて過ぎる。自分はアゝもう秋も晩れるのだナ、と想つた。そして熟々、わが世の春の遠きを感じたのである。

新刊紹介

△●●●●●無政府主義（久津見蕨村著）　無政府主義の一切の運動史を書きて、單に其の理論のみを說きたる者也。無政府主義を以て、たゞ危險なる、亂暴なる、恐ろしきものとのみ思惟する人は、必ずこれを一讀して其の蒙を啓く可き也。（價五十錢、本鄕區弓町一の廿六平民書房）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

戀に醉へる友に

小山田つゆ子

時雨は霽れぬ十二月、
空には塵も留めぬを、
拭ふに似たる紺青の、
心の雲を拂はずや。

色濃き紅の玉椿、
時し廻れば天地の、
思ひ淡けき山茶花も、
默示に訣別つぐるなり。

詩人の涙糧にして、
今淅瀝の風たてば、
驕りし花のありしかど、
見よ君、榮華いづこぞや。

果敢なき夢の香に醉ひて、
さかり久しと見る勿れ、
浮きたる戀の仇花を、
替らぬものと云ふ勿れ。

花は紅きも霜ふれば、
雲は白きも風ふけば、
萎まぬ蕋のあるべしや。
とても消ぬべき運命也。

赤き縁の糸太う、
戀の心の解けぬ間に、
今、花形に結ばれし、
時雨の降りも掛りなば、

悲しからずや君が手は、
悔恨の血に染められん、
褪せ行く糸の雫にて、
破れし小胸を擁きつゝ。

花は萎みて雲は散り、
あゝ凄愴の人の世の、
戀は移りて名は消ゆる、
つらき運命を君知るか。

さらば歌ひね、紅の、
結ぶ花輪の解けもせで、
色よき糸は褪め易く、
あだし時雨に濡るものと。

さなり今年のわが花は、
又來ん秋に逢へばとて、
去年誰が手にか咲きにけん
もとより我の物ならず。

晝に蝴蝶のとめ來れば、
夜の間に露のおとなへば、
蝶と睦れて舞ひ遊び、
しとゝに濡るゝ浮き心。

花は無常の心なり、
果敢なき戀に醉はんより、
人は頼めぬ世の姿。
去りて自然に歌はずや。

時雨は霽れぬ十二月、
空には塵も留めぬを、
拭ふに似たる紺青の、
君いざ雲を拂へかし。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

女學校評論

（一）實踐女學校

目黒里人

●時代の犧牲、下田歌子　記者は近郊澁谷の一隅に割據する實踐女學校に評論の筆を染めんとするに際して、先づ校長下田歌子に對して記者一流の觀察を下さなければならない。

下田歌子果して何者なるか、社會の或る方面から彼女は殆ど女王の如き畏敬な稱はれつゝあると共に、或る方面からは殆ど如何はしい女性でゝもあるかの樣に唾棄せられて居る。

此の如く彼女の一身は殆ど毀譽褒貶の礫を以て完膚なき有樣であるけれども、彼女の事業は依然として盛んに、彼女の生活は依然として豪奢なものである。彼女の現在は恰かも十字街頭に傲然として突き立つた立像のようなもので、其下に喝仰の老若男女を跪づかせ得るゝ共に、慘風悲雨、常に彼女の頭上に濺ぐ、之彼女が一見強者なるに似て、亦憐むべき苦悶の女性たる所以である。

一言にして云へば彼女は現代の犧牲である文明模倣時代の犧牲である。舊道德、舊習慣漸く頽れて、新道德、新習慣の未だ確定せざる過渡社會の犧牲である。此點に於て記者は滿腔の同情を以て彼女に對せざるを得ない。彼女も亦弱き女性の數には漏れない。

●最愛の寵兒　實踐女學校は下田歌子が現在のあらゆる地位と榮華とを略しても、之に代へ能はざる最愛の寵兒である。實踐女學校は彼女が得意時代の産物ではなくして、寧ろ彼女がはげしい社會の習慣、感情と爭ふて、寂しい人生の秋を知覺した時代の産物で、一面に於ては彼女が得意の經營とも見られるが、又一面に於て彼女の苦悶の反影である。

明治初年の歐化主義は、一時内容の伴はざる飜譯的の婦人問題を輸入した。此時に於て彼女は、曲眉豐頰、所謂近世式の美貌を振りかざして、鹿鳴館の西洋樂に歩調をとつて醉へるが如き社會の大舞臺に登つた。觀客の喝采は此才女の胸に湧く若き血潮を躍らしめた。彼女は割るゝが如き拍手の裡に、其得意の才藝を演じ盡したのである。

猜疑、嫉妬、彼女はそろ〳〵黒い浮世の闇に其手を

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

握られた。之と共に反動といふ恐ろしい强敵が彼女の前に現はれた。國粹主義、之實に彼女にとつての强敵であつた。彼女の設立した婦人會、彼女の主唱した教育會、皆一度は婦人を覺醒せしめて『横暴なる男子』に當らんとする、男女同權の武器であつた。けれども社會の大反動が歐化主義の熱よりも寧ろ一層强烈なる伏能を以て彼女の前に迫つた。彼女の婦人會は何時の間にか、其正體を變じて今日より見る時は寧ろ頑迷なる舊思想の婦人會と變つた。其機關雜誌は徒らに上流の舊道徳、舊習慣に媚ぶる最も退歩した『御姫樣雜誌』となつて仕舞つて、會費の集金人が時々坊間の雜誌店の押賣人と間違えられて玄關拂ひを喰ふといふ迄に生命を失ふて仕舞つた。

慧巧なる彼女も之等の婦人會と共に速やかに國粹主義の旗下に降つて、宮内省を本城として確乎たる地位を獲得した。皓歯紛黛の人、鶏冠長劍の人彼女の袖は幾度か姫芝の露にそぼぬれた。彼女の裾は幾度か廻廊の朝寒むに靡いた。權勢の酒、虚榮の盃、此の如くにして彼女は人生の秋に至つたのである。

嫉妬、憎惡、彼女は恐ろしい仇敵の刄もうけた。彼女はつらい骨肉の累をも知つた。五十にして命を知る。

彼女もまた、うつし世の虚榮の外に、權勢の外に、人生の或るものに觸れた。實踐女學校は實に彼女が此時代の經營に屬するものである。

◉聲調の低き女學生●●●●●●

聲調の低き女學生と云へば吾人は先づ市内に散在する裁縫學校、職業學校の女學生を連想せざるを得ない。けれどもそれに次で俗惡な氣風を有して居るものは實踐の女學生である。

社會の古い感情に媚ぶる樣な、古い習慣に諂ふ樣な、何とはなしにワザとらしい調和に非常な不自然の跡が見えて、偏狹な、固陋な、頑迷な、不合理的な、一言にして云へば下田歌子式の、宮内省的の校規と制裁で固められた、彼等には活々とした新時代の生命は更に認られない。ハイカラでないと誇るのか、御轉婆でないと誇るのか、好し、それも今の新聞記者や、今の老人連の嫉妬心に媚びるには、妙策でもあらう。

けれども、アノ活氣のとぼしい。殆ど死人の樣な幾百の學生の眼にも尚現世の虚榮に憧れる、現世の榮華を慕ふ亡者の樣な光が浮んで居るのを何とする。吾人は今の新聞記者と今の老人連からハイカラの譏を免れたればとて、決して、虚榮に媚び、榮華を慕ふて、獨立の氣象に乏しい、奴隷的な、乞食的な、貴族崇拜の根性が其骨肉にまでも染み込んだ實踐女學校の校風を

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

快しとせざる者である。

●●●●●●●●

●校衣の制定―頭髪の裝飾　澁谷の近郊に杖を曳く人は路に一種異樣の服裝をした女學生に會ふであろう。アレが實踐女學校の校衣で、藤原時代の服裝と、西洋服とを折衷したような、極めて不格好な優美な點に乏しい、それかといふて純粹の西洋服の樣に快活でない、何處から見ても感心の出來ないものである。

憐れむべきではないか、妙齡の處女に強ふるに六七十の婆さんも好くせざる古代模樣の、古めかしい色合の、不調和極まる制服を以てするとは。吾人は何故に當事者がもう一歩進めて純然たる洋服を採用しなかつたかを怪しむのである。けれども此和洋折衷の滑稽が側面から見るとやはり校長下田歌子の苦悶の影であるのだ。

或は辯ずるだろう。校衣の制定は女學生の陷り易い奢侈の風を矯正し得るものであると。けれども質素なる衣服といふ事と優美といふ事とは必ずしも兩立しない事ではあるまい。ハイカラと云はれる事を恐れて、藤原時代の服裝を調和した程の當事者が其校衣の素材と色合とに於て、殆ど女子の年齡を無視した極端なる強制法を採るのは甚しい矛盾ではないか。

其證據には、實踐女學校の生徒は反動として、頭髪の裝飾に非常な濃艶な好みを施すに至つた。釵でも、リボンでも濃厚な妖艶なものを喜んで、更に清楚、瀟洒といふ趣味を解せざるものゝ如くである。此學校には工藝部といふものがあつて、造花は御手のものである。そこで思ひきりコッテリとした頭髪の裝飾に心を碎くのだ。白粉紅粉はもとより免れ得ざる所である。

校衣を強制せられたは好いが、ヨク／＼嫌なものと見へて、制服を學校へ疊んで置いて往復は通常服に海老茶袴を穿つて、例の濃艶な、下品な風姿を誇り顔に通學する者もあるようだ。恁んな學生の油斷のならないのは勿論であるけれども、之は一面に於て強制的校衣の不完全に起因したもので、大に同情すべき點もある。當事者三省せよ。

●●●●●●●●

◉雜誌『日本婦人』の將來　『日本婦人』といふ雜誌は下田歌子の機關雜誌で何とかいふ婦人會の名で發刊されて、其會費と實踐女學校生徒の購讀によつて維持されて居た、婦人雜誌中の最も保守的な、貴族的な、阿諛的な、偏狹、頑迷な、固陋なものであつた。

此學校の生徒の缺點は此雜誌の惡感化による所が多いのだ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

處が始めに述べた樣に下田歌子は昨今漸く自分の確乎たる地步が此實踐女學校の運命によつて定まるものであるといふ事を自覺して來た。彼女は兎に角、權勢と榮華の非を悟つた。彼女は近頃「日本婦人」の大革新を斷行して早稻田の島村抱月なんかを擁へ込んで、大分或る方面に新活路を開かんとして努めつゝ在るらしい。

彼女の遣り口の如何は別問題として、彼女が是までの權勢と榮華の地位の決して賴むに足らざるを知つて老後の半生を此學校の經營に捧げんとする事は、吾人が彼女の爲に甚だ喜ぶ所である。

◉結論●●　實踐女學校の生徒は多くは中流以下の子女である。下田歌子が華族女學校に於て相見るが如き虛榮と奢侈と傲慢の結晶たる紳士閥の子女ではない。下田歌子は一方華族女學校に於けると同じような態度を以つて此中流以下の子女に對するが故にどこかに、現實の榮華に阿諛するような、調子の低い活氣に乏しい、獨立の氣象に缺けた不合理的な、不自然な校風を產み出すのだ。社會の恐なる習慣、恐なる感情の前に降參しないで、何處までも合理的に、進取的に、中流以下の子女に對する大覺悟を喚起し、獨立の氣象を鼓吹して、世の所謂、良妻賢母主義以上に、一步を進める事は出來ないであろうか。

下田歌子よ御身にして眞に老後の半生をよくせんと欲するならば、先づ華族女學校に於ける御身の地位を捨てよ。宮內省に於ける御身の勢力を抛て、花の朝にも、月の夕にも、再び芭蕉塚の露を踏むなかれ。此の如くにして一切現世の虛榮と權勢に執着を斷つて、靜かな澁谷の郊外に、可憐なる平民の子女と伍して彼等の精神に新しい生命を鼓吹して天下の婦人の爲に、飽までも合理的な積極的な活路を開いてやる志はないか記者は御身が此決心を以て自ら奉ずる甚だ薄き生涯を送る事の、今となつては到底不可能なる事情を好く知つて居る。御身は今や兩手を以て其眼を蔽ひながら苦しい權勢の路をよろぼひつゝあるのだ。

記者は杖を澁谷の近郊に曳く每に聲調の低い實踐の女學生を見て、いつも過渡時代に於ける女性の苦悶といふ樣な事に思ひ至るのである。

（完）

次號には「女子大學評論」を掲載すべし。里人は如何に目白臺の學風を評隲すべき乎。讀者は眉に唾して煙に捲かれざる樣すべし（記者）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

●雑誌のぞき（前月着社の分）

●『ツンボ日記』（鼠骨）……表の敷石を車のガラ／＼と騒ける音が微かに耳に這入る……忽々（借金取りが）お出なさつたと思ふ間もなく格子を荒々しくあけて、彼奴の癖なる横柄に大音聲で御免といふのが意地惡く耳へ這入る……「誠にご苦勞でした、實は一週間許り前から耳が病んで少しも聞えなくなつて病院へ通つてゐる所なんです」予は機先を制した積りで切出す彼は眉をしかめて大きな聲で「餘程惡いのですか」と言つたのは、かすかに聞えたがワザと聞えぬ振をして默つて返答をせぬ。「實は貴方のお出のない內に當方から使を上げやうと思つたが御承知の通り無人で、今日は又家內は皆留守でして」と言ふのを彼は皆まで言はせず「どうせ此の方角へも廻りますから……」と更に大きな聲で怒鳴るから余の耳へも僅かに這入つたのを又聞えない風をして「さうです醫者は大變に惡いと言ふのです、實は入院せよと言ひますが、それも費用が嵩みますから」と餘所事を言つて遣つた……（ほとゝぎす十一月號）

▲いかにもホトトギス流で面白いぢやないか、どんな顏をして言つたか見たかつた、さぞ眞面目腐つてやつたとだらう。

●蠅（松本駄谷譯）……翌日の午後に彼（蠅）は飄然と歸つて來た。今度は彼は町から情夫を伴つて來た……が突然彼の情夫は彼に跳びかゝつて怪しからぬ所業に及ばんとした。そこで僕は彼を叱つて怒鳴りつけた。破廉恥漢何を爲る……そんな事を人目も憚らず爲すべきでない……汝は僕の好かぬ其情夫を逐ひ出せ。斯う言放つて僕は剪刀に手を掛けた。然るに彼等は机の隅で狎戯けてゐ……る……僕は定規を振り上げたが彼等は僕を侮つて益々狎戯けて居る。汝等は復た其處で何を爲る！と僕は白眼みつけた。が……彼等は徐々と互に身を寄せ復も怪しからぬ所業に及ばんとした。そんな事を爲てはならぬ！と僕は叱つた。が彼等は平氣で其事を爲た而も僕の目前で爲た、是に於て僕の堪忍袋は破裂した。僕は定規を振り上げて電光石火彼等に一撃を加へた……彼等は僕の一撃の下に斃れた……（うらにしき十一月號）

▲我々の自由戀愛主義を見て「怪しからん怪しからん」とヒドク憤慨するチヨン髷道德家が燒餅半分の癇癪がイカにも善く寫し出されてゐるではないか。前の『ツンボ日記』と併せて予は之を『痛快なる寫生文の一對』といふ。

●あん火（佐藤紅綠）……竹螺を吹くのは此島主の佐吾十爺で、彼が此村を起してから二十年餘、朝と正午と夕方と一日も休んだ事が無い。此音が聞えると島の中は荷車の音、牛の吼える聲、涕子の上で林檎を捫ぐ鼻唄、草拔の女共がわけなしに笑ふ聲など、急に賑かになつて朝日の活々とした力が木となく葉となく土となく流れ渡る。……

與茂作が去つて了ふと爺は續けざまに煙草を吹いて居たが、急に思ひ出した樣に「お福よ、お福やあい」と呼んだ。

爺は朝から晩まで寸時も落付いて居ない、眼の覺めて居る間は用事の有る無しに拘はらず人を呼んで居るので、其れが十五六年前に、女房に死なれてから一層烈しくなつた、其中に最も多く呼ばれるのはお福である。

お福の素性は誰も知つてるものが無い、死んだ女房が何處からか貰つて來たといふが、拾つたのだらうと言ふものもある、丁度お福が二歲の時で、其れから間もなく婆さんが死んだので、子もなく孫もない佐吾十は男手一つに育て上げた、這へば立て立てば步めと段々大きくなればなるほど爺さんの可愛がり樣は一通りでなく、明けても暮れてもお福をば自分の側から離した事がない、彼は其麼に腹を立てて居る時でもお福の顏を見ると直ぐ顏の皺が弛んで了ふので。

のみならず佐吾十はお福の乳呑の時から十七歲になる今まで、今だにお福を抱て寢てるので村の者が「旦那、お福さあも旣ういゝ女娘盛りになつただに」といふものがあると、彼はいつも機嫌よく笑つて「こりや俺がの行火だでのう、えらあ足が暖まるだ」といふ、是が源因になつて村中ではお福に「あんくわ」と綽名をつけた。

「お福やのう」と爺は林檎の木間から此方へ來る姿を見付けて呼んだ……

不圖、小屋の中で人聲がするので爺はハッと足を停めた、別に足音を忍ばすといふではないが、斯る時に偶然の物音を聞く時には誰しも自

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

分を隱して見たいやうな氣がする者で。爺は物と小屋を雨除に圍んだ黍殼の間から中を覗いて見た、途端に其兩肩を擁めて棒の如く立悚んだ。

行火のお福と乳搾りの鶴公が秣の中に半分づつ身體を埋めて互に抱合つて小聲に話して居たので。

一旦足を戻して、再び覗いた時には佐吾十は獵犬が手强き獲物を嗅ぎ當てた樣に、總身の慄ひを强て抑えて立つて居たが、軈て急ぎ足でスタ／＼と引返した……

不圖目が覺めて四邊を見廻した。いつもならば自分の左傍にお福がぐつたりと柔かい胸を出して眞白い腕を自分の胸の邊りにかけ正體なく眠つて居るので、爺は其手を握つて見たり口に當てたりしてる中に、ゆつくりとした樂しい思に再び眠に入るのだが、今ま急にお福を隣室に追ひやつた事に氣が付くと其れが俄かに　つたいやうな淋しさを覺える。月は恰も窓の方へ廻つて居る、格子の影ながら鮮やかに抛げ込む光りは、其處に積んである絲枠や、繭外しの器械などの影をも冷たく枕元の疊に落す。と、暗い壁の方から蚊の聲が一つぶうんと聞える……

或日爺は氣分が惡いといふて一日朝から室に引籠つて居た、此んな時にはいつもお福を呼び通しに呼ぶのだが、此日はお福をも室の中へ入れぬ事にして、食事の時だけ、茫然と出ては飯を白湯で掻き込み、其れが濟むと直ぐに引込んで物思ひに沈んで居た。……

其翌日此付中で肝を潰す樣な話が興茂爺の口から他の口へと傳へられた、其れは行火のお福と鶴吉との觀音の事で、興茂爺は飛んで廻つて村中の人を集め、早朝から家普請に取掛つた。……

爺は態とらしく快活に笑つて「そんだら仲よく暮らせよう鶴公、お福可愛がつてやつてくれろよ」と暫時默つて「お福、汝あ嬉しかんべいのう」と言て俯向きながら互に顔を見合せては恥かしさうに笑つて居る二人の上から直ぐ眼を反らし、「うむ嬉しかんべい」と再び繰り返して「それだら。はあ行けよ」と瞳も動かさず何かに見惚れてる樣な目をしながら帽手といふ……

「爺さま」と再びお福は呼びかけて、其の膝の上に手を置き、覗くやうにして下から顔を見上げた、と、佐吾十は突然其手を確乎と握つて瞬きもせずお福の顔を見下し「お福か」と夢の樣に小さな聲で言つたが、はつと氣が付いた樣に「お福か」と再び大きな聲に呼び直し、ずつとお福の身體を膝の上に抱き寄せて「お福よう、汝あもう歸る事なら無えぞ、爺さまはな、爺さまはな」言つて石の如く默つて了つた（終）（中央公論十一月號）

▲これ紅綠子が處女作なりといふ。吾人は近來稀に見る所の心ゆく作品として喜んで全篇二十六頁を通讀せり。思ふに今後の小説界は此種の傾向を帶ぶるに非ずんば歡迎せらるゝこと能はざるに至らん。（韶）

●新刊紹介

▲婦人世界（月刊）　逐號ます／＼奇麗になれり、例により村井弦齋氏の「……は如何に……すべきか」といふ婦人の日常生活法あり親切丁寧を極む、坪井博士の「野蠻國に於ける夫妻の選擇法」など亦甚だ面白し。（實業の日本社發行）

▲日本の家庭（月刊）　紙質の精良なると色刷寫眞版や表紙の美しきとは此種雜誌中の王なり、大村仁太郎氏の「少女と戀愛」など讀むべし。（同文館發行）

▲英學生（月二回）　本月より紙數を增し定價を四錢に引上げたり、寫眞版など挿入されたれど吾人の老婆心よりすれば寧ろ從前の如く小ヂンマリと引しまれる方善くはあらざりしやと思はる。（神田表神保町東西社發行）

▲農學講義（月二回）　講義には作物汎論、森林、蓄蠶、土壤、肥料、園藝、農産製造、農業經濟、植物生理諸學科あり、講師は著名の博士學士十數名にして尚ほ外に論說、雜錄等あり。（本郷弓町一の廿六日本農藝學會發行）

▲産科婦雜誌（月刊）日本橋濱町日本産科婦協會
▲婦人新報（月刊）　赤阪靈南阪町十四其社
▲婦人衛生雜誌（月刊）　私立大日本婦人衛生會
▲家庭週報（週刊）　目白女子大學校
▲婦女新聞衛化號（週刊）　牛込區五軒町其社
▲家庭新報（月二回）　小石川久堅町五一家庭社
▲少年（月刊）　時事新報社
▲革命評論（月二回）　神田美土代町其社
▲牟婁新報（毎三日發行）　紀伊國田邊其社
▲新人（月刊）　小石川表町新人社事務所

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

(Kono ran wa Fukao Sho go kaku.)

Hahano Toshi.

Sekaijū de umareru kodomo no hotondo 4 bun no 1 wa 24 sai made no onna kara umare, 2 bun no 1 wa 28 sai o kosanu hito kara umare, ato 4 bun no 1 wa 28 sai ijō no hito kara umareru to yū koto de aru.

30 sai igo ni kekkonsuru onna wa futari ijō umu koto ga muzukashiku, 26 sai igo ni kekkonsuru onna wa 3 nin ijō umu koto ga muzukashii to yū koto de aru

Kore de miru to, kekkonshite ichiban yoi toki wa jūhakku kara nijūshigo made no aida deshō ka.

Ko-Oroshi.

Amerika Gasshū Koku de wa ko o orosu koto ga sakanni okonaware, maitoshi sukunakutomo 200 man no akambō wa yami kara yami ni okurarete iru sō desu. Kotoni, kono osorubeki ko-oroshi o suru onna wa kōtō no kyōiku o uketa mono ni ooi to wa nantoyū koto nan deshō!

Nippon niwa sūnen rai "Kijo no Tomo" to yū kainin yoke no kusuri ga hayatte, chūtō kyōiku o ukeru jogakusei ga sakanni kore o tsukatte iru to yū koto desu ga, kono tsugi ni wa donna koto ga hayaru no deshō?! Osoroshii yononaka da.

Okinodoku desu ga!

Watakushi no uchi ni wa jochū ga hitori yatotte arimasu ga, watakushi wa seken no meshitsukai to yū dorei mitaina seido ga iya de tamarimasen no de, narutake jochū oba uchi no koto o tetsudatte kureru shinsetsuna tomodachi to shite atsukau yō ni shite imasu. Narutake yokeina koto ni hatarakasemai to omotte iru no desu keredo, tsui chōhōna no de tsukaisugite komarimasu. Jibun de mo sasugani ki ga togameru to miete, sono tambi ni "hontoni okinodoku da kedomo" nante itte wa tanomu no desu. Sonnani okinodoku na kurai nara, tanomazu ni jibun de shitara yosasōna mono to jibun nagara aiso ga tsukite, ningen to yū mono wa jitsuni ōchakuna, soshite, kokoro no yowai mono da to satorimashita.

改正定價

一部金六錢
六ヶ月前金三十二錢
一ヶ年前金六十錢
（何れも郵税共）

廣告料

特別一頁　十圓
普通一頁　七圓

▲本誌は毎月一回（一日）發行とす。
▲代價は小爲替を以てお送り下さい。郵券代用ならば五厘切手で一割増に願ひます。
▲御注文の時は必ず何發何號より何號まで何册の前金と明瞭に御記載を願ひます。
▲御手紙には必ず住所姓名をハッキリとお書き下さい。又御轉居の際は新舊の宿所を併せて御通知を乞ふ。
▲本誌は前金でなくては一切御註文に應じませぬ。前金の切れた時には帶封に「前金切」と朱印を捺して上げますから御注意下さい。
▲歐米諸國よりの御注文は別に一册に付二錢づゝの郵税を申受けます。

明治三十九年十一月三十日印刷
明治三十九年十二月一日發行

東京市牛込區市ヶ谷田町二の廿二
發行兼編輯人　大杉榮
兼印刷人

東京市京橋區日吉町十番地
印刷所　近藤商店

東京牛込區市ヶ谷田町二丁目廿二番地
發行所　家庭雜誌社

大賣捌所　上田屋　東京堂　良明堂　東海堂

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

◉歯科治療 自午前八時 至午後六時◉

神田區須田町二十六番地

歯科醫 吉瀬才市郎

勞働者諸君に限り藥價診察料共に御隨意

晝間執業者の便利上夜間十時迄治療仕候

◉眼科診察 毎日午前◉

京橋南佐柄木町五

（電話新三四五八）川上眼科院

外科皮膚病 梅毒 痔瘻 外科 [illegible]

診察 午前九時より十[illegible]で

東京 新橋際出雲橋 加藤[illegible]院

院長 獨國醫學士 加藤時次郎

分院 横濱神奈川臺。火木土午後三時至六時

小田原海岸 毎月曜午前中

産科 婦人科 朝長（ともなが）鷹二郎

横濱市眞砂町二丁目廿六番地

診察毎日午前

Digitized by Google

Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

改良ロンテニス 二重枠ラケット一組

一號品		一二、五〇〇
二號品		一一、〇〇〇
三號品		八、八〇〇
四號品		七、四〇〇
五號品		六、七〇〇
六號品		五、七〇〇
七號	小學用	四、七〇〇
八號	婦人用	六、〇〇〇
九號	婦人用	七、〇〇〇

東京神田裏神保町三 S.A. 安藤商店

ピンポン室内テニス

一號	一箱	一、二二〇
二號	同	一、五〇〇
三號	同	一、六八〇
四號	同	一、八三〇
號外	同	〇、八八〇

改良テニスネット

一號	一張	四間半	一、七五〇
二號	一張	五間半	二、二五〇
三號	一張	六間	二、四五〇
四號	一張	七間	二、九五〇

ゴム入フートボール

二號	一個	四、〇〇〇
三號	同	四、五〇〇
四號	同	五、〇〇〇
五號	同	五、五〇〇
六號	同	六、〇〇〇
七號	同	六、五〇〇
八號	同	七、〇〇〇

體操遊戲器械一切

東京神田裏神保町
安藤商店
電話本局四百八十四

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

◉新刊廣告

久津見蕨村著

無政府主義

全一册　定價金五拾錢

無政府主義と云へば人は直ちに血を思ふ、されど孔孟も之を說き、老莊亦盛に之を唱導し釋迦基督の切に之が出現を理想せしもの、西洋諸邦に於ける斯主義の、或は猛惡なるあり、或は温健なるありと雖も、其歸着する所や等しく一なり、本書は之が東西古今に通じたる偉人傑士の理想と硏究とを詳述したるものにして、之を恐るゝ人は勿論、其無政府主義の如何なるものなるかを知らんと欲するものは必ず一讀す可きものなりとす

東京市本鄉區弓町一ノ二六

發行所　平民書房

英佛獨西羅典

個人教授

▲授業料月三圓
▲用書隨意
▲時刻隨意
▲束脩無

麴町區三番町八十番地

山田嘉吉

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

慈善券

ライオン歯磨小袋入に添付せり詳細は實物に就き御承知あらんことを乞ふ

北米セントルイス萬國博覧會

名譽銀牌受領

發賣元　東京　小林富次郎

粉製 **赤罐入** 發賣

意匠嶄新且つ優美なる彩色罐入にして頗る携帯に便なり能く香氣の發散を防止し終に至る迄本品獨有の佳香を保つを得べし遠征の士其他旅行用に適せり

定價一箇拾貳錢

發兌元　大阪　小林支店